

『稲葉
佳景
無駄
安留記』

調査報告

(高草郡篇下)

無駄安留記

～高草郡～



湖山の名物

無駄安留記に、湖山の名物について次のような記述がある。

この小山邑に鰻の蒲焼名物。其外糠蝦小雑魚白魚あまさぎ池魚数多産す。

現代語に訳すると次のようになる。「この湖山村は鰻の蒲焼きが名物である。そのほかは、ぬかえび、小さい魚、白魚、あまさぎなど、池の魚が数多く獲れる。」

また、この記述に続く狂歌がある。

薯蕷のむかしはいざや穴うなぎ

とろろとすればすべりぬるぬる

現代語に訳すと次のようになる。「今穴に住んでいるうなぎが、やまももだった昔はどうだったのだろうか。すつととろろにするとやまいもは、すべつてぬるぬるする。それはうなぎになった今も同じだ。」

このように湖山村の名物で「鰻」の記述が目立つ。『因幡志』には、「池邊の村々魚漁す。鯉鮒鰻鰻等多し」、そして『稻場民談記』には、「湖山池には鯰・鰻・イナ・鯉多(ク)取(ル)」と記述があり、湖山池で鰻が獲れるとの記述が江戸時代を通じてはつきりと見られる。

そこで、さらに調査するために、湖山在住の田中武子さんにお話をうかがった。田中家は、江戸時代には湖山池の鰻の流通に携わっておられた。苗字、帯刀を許されていたお宅で、近代には鳥取初の女性県会議員が出たり、鳥取大学を、現在の湖山の地に誘致したりすることに貢献された。

田中家では、鰻を入れるためのかごや、湖山川を描いた巻物を見せていただいた。また、同席されていた中島さん、村上さんのお二人に鰻だけではなく、当時の湖山や湖山池の様子について教えていただいた。お二人によると「湖山は、産水と溝之口の二村が合わさって小山となった。因みに小山は、小さな山がたくさんあったため小山となつたらしい。現在の湖山へと変わったのは、『鳥取県の地名』にも、元禄国絵図・正保郷帳作成の際に改められたとの記述がある。湖山池は、昔、水面付近は淡水で温かく、底は海水で冷たかった。また、今では考えられないが、飲み水となるほどきれいだった。湖山公民館だによると、鰻を獲る方法



は主に、竹の節をとり、沈めて入っている魚を獲る竹筒漁や、縄に餌をつけて釣るはえなわ漁がある。」とのことだ。

今回の調査で、鰻が湖山池から獲られていたことは事実であったことはわかった。しかし、当時の鰻の調理方法や、鰻の蒲焼きが名物ということまでは分らなかった。ちなみに鰻の蒲焼きは、『江戸料理辞典』によると、「魚を開いて骨をとり素焼きしてから、醤油とみりんで作ったれをつけて焼くものである。」とある。湖山は伯州街道が通り、人々

の交通の多い土地だった。伯州街道は、伯耆街道とも呼ばれ、往來の行き交う人々も多く、この道を行き交う人々を相手に、蒲焼きが売られていたのではないかと想像できる。

参考文献・URL

山陰道 I <http://www.pref.shimane.jp/section/bunkazai/tekinichi/sann01/sann001.htm>

(天川 学)

大寺屋

無駄安留記に、

伯州街道あり。茶屋あり。

大寺屋追行馬士のうなづけは

馬もをがみをたれてこそゆけ

との記述と狂歌がある。

まず、記述を現代語訳すると、「伯州街道が通っている。茶屋がある。大寺屋まで行く馬士がうなづくと、馬も尾髪をたれていく」となる。

次に、狂歌を詳しく見ていくと、「馬もをがみ」の「をがみ」が「尾髪」と「拌み」の掛け言葉になっていること、また、「拌み」が「大寺屋」の「寺」に由来する縁語であることがわかる。しかし、実際の「大寺屋」は、「寺」とは関係がないことから、縁語や掛け言葉は作者の「言葉遊び」であったと推測される。

ここで無駄安留記というものに立ち返って考えてみたい。この無駄安留記は、多くの場合、筆者が実際にその場に出向いたうえで書かれたものである。このことを踏まえて考えてみると、この歌は、たんなる「言葉遊び」だけではなく、著者が大寺屋を歩いた当時の状況も反映された歌なのではないだろうか。

江戸時代中期、鳥取藩では、治水や灌漑のための開水路の開削技術が進み、新田開発も盛んに行われていた。しかし、因幡は、丘陵地が多い

こともあって、たびたび水不足に陥っていた。また、それと同じく深刻な問題であったのが、日本海の暴風とそれに伴う飛砂であった。これらのことから、砂丘は「不毛の地」とされ、そこからの飛砂により道が埋没して現地で生活する人々や旅人を困らせていたのである。

その悲惨な状況を打開しようとしたのが、米子の綿商人で、鳥取と米子を商用で行き来していた船越作左衛門である。彼は、天明五（一七八五）年、湖山池岸から伏野村中茶屋までの砂丘地に松を植林すること、移住して畑を開くこと、地肥しのため牛馬博労市を催すことなどを願ひ出た。そして、翌年、家建・牛馬市はそのつど願出することなどを条件に許可され植林に努めた。彼の死後一時中断したが、文政八年（一八二二）年に甥が後を継いで藩の協力を得て開発を続けた（『鳥取県史』、『鳥取県の地名』）。そして、船越作左衛門の業績をたたえ、彼の名を後世に伝えるため、この開発地を、彼の屋号である「大寺屋」と呼んだのである。しかし、その後も江戸時代から大正時代にかけて佐々木甚蔵、判九朗兵衛など、砂防事業を展開する者がいたことを考えると、田畑が増加したことなどから多少の改善はみられたものの、飛砂の問題を完全に解消するといふことはできなかったと推測される。

以上のことを踏まえて冒頭で紹介していた歌について考えてみた



い。無駄安留記の著者が大寺屋を歩いた当時、大寺屋までの道は、強い風が吹くと飛砂がひどかったと予想される。従って、「馬士がうなづく」とは、飛砂のために、前が見えず、馬士はうつむき、馬も「をがみをたれて」馬子とともに歩いたという大寺屋付近の情景をうたった歌とも考

せいがんじ 栖岸寺 猫薬師

無駄安留記本文に記されている猫薬師は、現在鳥取市湖山の栖岸寺に安置されている。水中山栖岸寺は浄土宗の寺院で、本尊の阿弥陀如来は東伯郡の東郷池より上られたと言い伝えられている。宝永七年（一七一〇）に「西岸寺」を「栖岸寺」と改めた。延享五年（一七四八、寛延元）には初覧山（現在の湖山町井津水地区）にあった本堂を現在地（湖山町北）に移転した。享保期から行われている双盤念仏（双盤台に並べた双盤鐘を撞木で叩きながら「南無阿弥陀仏」を唱える引声念仏で常念仏とも言う）は現在も継続されている。双盤とは、浄土宗寺院で十夜法（御仏や御先祖に秋の豊作物を供え、報恩感謝を表す法事）という回向を行うとき、引声念仏を唱えるための伴奏として使われる打楽器である（『鳥取県大百科事典』）。

本堂には、本尊の阿弥陀如来だけでなく、丸い玉のようなものを持っている「薬師」像がある。丸い玉は「薬」を表し、祈願すると病気が治ったり、失せ物が見つかったりするという御利益があるとされている。

えられるのではないだろうか。この歌は、掛け言葉や縁語のような和歌の技法を用い、筆者のユーモアを織り交ぜつつ、且つ、当時のこの地域周辺の情景をよく反映している歌なのではないかと考える。

（酒井 美香）

また、薬師様の向かって右隣には猫のミイラが祀られている。御住職のお話によると、猫のミイラは江戸時代からあり、保存処置は特に何もしておらず、そのままの状態で保存しているという。この猫は薬師様に仕えているとされており、このことから薬師像は「猫薬師」と呼ばれるようになったのだ。もともとは現在の栖岸寺の南側湖山小学校横の墓地にあったが、昭和六十三年（一九八八）八月に栖岸寺に移転したものである。





無駄安留記には、この猫薬師について書かれた本文と、詠まれた歌がある。

同猫薬師

住昔産見長者の飼猫なりと。今式^{小山}村草庵に安ず。猫のことを祈りて験ありと。奇なり。

盆はまた里の童と打連れて

むかしおぼえの猫踊りせむ

現代語訳すると、本文は「昔の産見長者の飼猫であるということだ。今、湖山村の草庵に安置されている。猫に関することを祈ると御利益があるということだ。不思議なことである。」となり、和歌は「盆にはまた里の子どもたちと一緒に、昔身につけた猫踊りをしよう。」となる。

作者は猫のミイラを「猫薬師」であると解釈している。それは先ほどの無駄安留記本文で「猫薬師」とは産見長者の「飼猫」であることと書かれていることから分かる。しかしそれについては作者の勘違いであり、薬師像自体を「猫薬師」

という。

この猫薬師について調べていくと、次のような伝説が存在していることがわかった。野津龍『子どものための鳥取の伝説』（山陰放送、一九七九年）によると、昔、浄西坊というお坊さんがお勤め中に、仏壇の下に光っている物に気づき、調べてみるとそこには猫のミイラがあり不思議に思ったという。その夜浄西坊が眠っていると、この猫が夢の中に現れ、「自分は湖山長者に飼われていた猫で、田んぼが湖山池になるほどの洪水にあったときに流されて溺れ死んだ猫である、『猫島』に打ち上げられミイラとなったが信心を心がけたおかげで薬師に仕える仏になることを許された」と言った。それを聞いて浄西坊はこの猫のミイラを厨子の納め、ご本尊である薬師様の右隣に祀ったという。それから「湖山の猫薬師」と呼ばれるようになったと言われている。湖山長者に関わる伝説で、猫薬師との関連で伝わっていることが興味深い。

さて、無駄安留記の和歌に「猫踊り」という言葉が出てくるが、この「猫踊り」とは、宴会の席で猫にさせる踊りのことである。熱くした鉄板に猫をのせ、逃げられないように囲いをし、三味線を弾く。そうすると猫は熱くて、踊るように飛び跳ねる。これを繰り返すと、条件反射で三味線の音を聞いただけで踊りだすようになる。

しかし、この和歌で詠まれている猫踊りは、文意からしても前述したようなものではなく、猫を模した盆踊りのようなものであると考えられる。

（田中 歌織）





図1

洗濯島

無駄安留記本文には、洗濯島について「洗濯島 沖に在り」と記しており、また、無駄安留記の絵の右上には「伏野洗濯島」という記述があることから、洗濯島は伏野村の沖に位置していた島であると考えられる。この洗濯島は、無駄安留記の絵の中で中央部分に大きな空洞が描かれていた。これは洗濯島の持つ大きな特徴であると考え、この特徴を踏まえた上で、伏野へ現地調査に向かった。

現地では、写真にあるような島を確認することができ、無駄安留記と概ね一致する構図であった。ただ、陸からは中央部分の空洞については確認することはできなかった。しかし、船で現地へ行った人からこの島に空洞があることを聞くことができた。この島について、地図を見て調べてみるとその位置関係から大島であるということがわかり、その周りには、小島、大島島という二つの島があるということもわかった。これらの島は総称して一般に伏野大島と呼ばれているようであり、撮った写真と無駄安留記の絵の類似、伏野の沖に位置するという位置関係から考え、洗濯島は現在のこの伏野大島にあたるのではないかと考えられる。

ここで、洗濯島という一風変わった島の名から、現在の名へと大きく変わっている点を疑問に思いさらに調査を進めることにした。調査に使った絵図・地図は、現在の伏野大島の図を図1、『高草郡絵図』（鳥取県立図書館所蔵）を図2、その拡大図を図3、『因幡国絵全図』（同）を図4、『大蔵省進達因幡国明細図』（同）を図5とし、以下にその考察を述べていく。



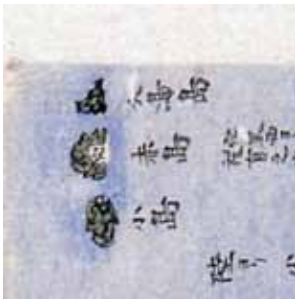


図3

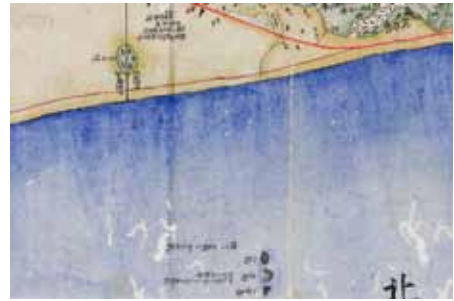


図2

まず、『因幡志』を見てみると、伏野にある島は宮島であるという記述があった。また図2を見てみると、伏野の沖には三つの連なりのある島（大島・赤島・小島）が確認できる。これらの島を拡大した図3と図1を比較して見てみると、真ん中の赤島を除き、名称、島の構図ともに一致している。また図4を確認してみても、位置関係から伏野に位置しているのは、赤島とその周りの島であり、宮島ではない。この図の赤島中央部分には空洞と思しきものも確認できる。

さらに図5を確認してみても、伏野に位置しているのは赤島である。しかし、この地図では、赤島の東側に見える複数の島々も、洗濯島であるという可能性を考えることができ、疑問は残る。だが、図2に描かれた島々と伏野大島の酷似性から言い、やはり洗濯島は宮島ではなく、大島・赤島・小島ではないかと考える。

また、この調査中、洗濯島という名前が載っている資料は無駄安留記以外になかったことから、洗濯島は正式な名称ではなかったのではないかと考えられる。そして、無駄安留記には次のような狂歌が詠まれている。

打ち寄る波に洗ふて磯草の
のりつけてほすせむだくのしま

現代語訳は、「打ち寄せる波に洗われた島に磯草ののりをつけて干される。それが洗濯の島である」となる。この狂歌から、無駄安留記の著者は、この島を磯草がまるで洗濯物を洗って干しているように見えているようだ。洗濯島の名称は、こうしたところ由来しているのかもしれない。

（中村 勇太）



図5

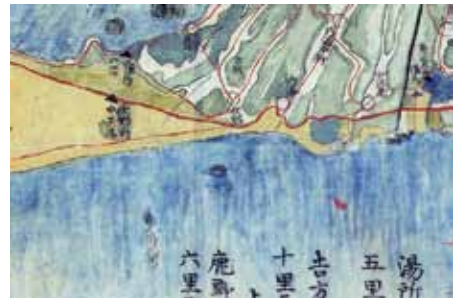


図4

高住不動ヶ寄

無駄安留記に、高住不動ヶ寄の絵が載せられている。しかし、他の名所のような説明の記述や和歌・狂歌は載せられていない。絵を見てみると、長い階段の上に、岩に挟まれるようにして小祠が描かれていることがわかる。

不動ヶ寄について『因幡志』には、高住村に「不動明王」という名が掲げられているだけで、説明はなく、その他にも「不動ヶ寄」についての情報は一切載せられていない。また、『鳥取県の地名』にも記述がなく、探し出すのが困難であったが、文政年間（一八一八～一八三〇）に鳥取藩が作成し、明治二〇年（一八八七）に鳥取県庶務課地理係が縮写した「因幡国八郡の絵図」に載っていた。現在は、高住にある高江町公民館の北西で、湖山池の岸辺に位置している。

我々は実際に不動ヶ寄に調査に行った。当時の地図と現在の地図を比較してみると、縮尺は異なっているものの不動ヶ寄の位置は変わっていないことがわかる。そこには絵と比べると少ないが、石段が数段あった。その上に、岩と岩の間に挟まれるようにして小さな祠が造られていた。写真は足場が悪く近くからしか撮影できなかったが、もう少し後方から撮影することができれば、無駄安留記の絵に近いものとなるだろう。

不動ヶ寄の記述は『松保郷土誌』に載っていた。それによると、小祠は幅〇・八メートル、高さ約一・六メートル、奥行き〇・六メートルで、



その扉の中には、右手に利剣左手に綱索じょうさを持つ石造の不動明王の立像があるらしい。その小さな祠の前に「山根弘栄」という人物の名前が刻まれた石柱が立てられている。この人物は、「湖山のお大師さん」としてここをお守りしているとのことである。また、この不動ヶ寄からやや離れた所に古不動といわれる洞窟があるという。

同書には、次のようなおもしろい記述も見られた。「不動さん祭り」という祭りが、かつて行われていた。それは、湖山のお大師さんを祭司とし供物は婦人の当番が受けもち、若者組は猫島から不動さんにかけて杭を立て（稲木の竿を利用）それを縄で繋ぎ、提灯（氏神祭用のを代用）を取り付けて点灯すると、夜の湖上に赤い橋が架かり、村人は一変した夜景を楽しんだ。猫島では青年たちによるソーメン食い競争が行われたが、戦時態勢の中で消滅した。祭礼は旧暦の六月十五日に行われていた。非常に興味深い祭りであるが、なぜ稲木の竿が杭なのか、なぜ猫島と不動ヶ寄を結ぶのか、なぜソーメンを食べるのか多くの疑問が出てきたが、今回の調査では残念ながらわからなかった。

（天川 学）



すくも 糕塚

『因幡佳景 無駄安留記』下巻・高草郡の「糕塚」の項には、次のような記述がある。

是産見の長がすくもを積し址なりと。海辺にうづ高く小松生たり。

現代語になおすと、「これは産見の長（産見長者）がすくもを積んだ跡だということだ。海辺にたかく隆起して、小松が生えている。」となる。また『因幡誌』、「伏野村（中ノ茶屋）」の項にも、

糕塚と云ふ小丘あり此長者全盛の時スクモを捨ける跡なりと云傳ふ

という記述があり、かつてはそういった塚が実際に存在し、それにまつわる産見長者の伝説も言い伝えられていたようである。

「すくも」とは、米のみ殻を指す。ここに、金の団扇で入り日を招き返して一日のうちに田植えを終わらせてしまったという産見長者の伝説との関連性を見ることが出来る。その産見長者が収穫した米のみ殻（すくも）を積んで塚となったものがすくも塚である、と言い伝えられているとすると、すくも塚は伝説上のものなのであろうか。

しかしながら『高草郡絵図』（鳥取県立図書館所蔵）（図1）では、伏野と加露との境界線上に細長い円形が描かれており、そこに「スクモ塚」

という文字が書き込まれている。境界線は黒の線で太く描かれており、その真上にすくも塚をあらわす円形が描かれ、ちょうど境界線によってすくも塚が二分割されたような形となっていることから、伏野村と加露村の境界として大きな意味を持っていたのではないかと推測することもできる。この絵図は、文政五年（一八二三）のものである。

また、明治五年（一八七二）の『大蔵省進達因幡国明細図』（鳥取県立図書館所蔵）（図2）にも、おおよそ同じ位置に「すくも塚」が記載されている。こちらに境界線は描かれていないが、円形が南北に少し伸びた形となっている点は、先程の『因幡国八郡の絵図』と近いものと思われる。

明治三十三年（一九〇〇）の『陸軍省二万分之一地形図』（図3）には文字での記述は見られないものの、境界線の左側に山のようなものが記載されており、それまでの地図中で描かれてきた「すくも塚」を表



図1



図2



わしているのではないかと思われる。
上記のような絵図や地形図にその名称が記載され、その姿が描かれていることから、すくも塚とは決して伝説上だけのものではなく——現実に産見長者によって積まれたすくもからできたというわけではないとしても——その周辺には小さな丘のような地形が確かにあったのではないか、と推測することができる。

すくも塚の位置を判断するうえで重要なポイントとなるのが、湖山池に突き出た龍ヶ崎である。今回参照したすべての絵図・地図において、ここから北へと垂直に線を延ばした先にすくも塚（ないし、それを示したであろう円）が描かれていた。

ここで現在発行されている『国土地理院 電子国土基本図二万五千分の一』（図4）を参照してみると、

上述の位置に円状の等高線を確認することができた。しかしながら現地調査においては、写真で見ただけではわかるようにその地点にすくも塚と呼べるほどの小高い丘を見つけることができなかった。塚という特性上、年月の流れによって風化してしまったのだろうか。

ところで、他にも「すくも」と名の付く地名は、山口県徳山市の給島、広島県安芸高田市の稼地、

という具合に中国地方にいくつか点在している（『山口県の地名』・『広島県の地名』）。現在の鳥取県内にも八頭郡に「すくも塚」という地名が、東伯郡に「すくも塚」と呼ばれる山が存在しており、呼称としてはそう珍しいものではないようである（マピオン、Google Mapで検索）。

また、広島県広島市西条町の土与丸には「すくも塚」と呼ばれる土盛が残っている。ここには牛満長者と呼ばれた長者が住み、その屋敷跡と呼ばれる敷地内に大量のすくもを捨ててできたものだと言ひ伝えられているという。

この広島県のすくも塚においても、牛満長者という長者の伝説によってその成り立ちが語られており、これは無駄安留記におけるすくも塚が産見長者の存在とともに語られている点と同様ではないだろうか。小丘となるほどのみ殻（すくも）を積むことができるということは、それだけ多くの米の収穫があるということを示しており、「すくも塚」というものが長者の偉大さを語るにあたってモチーフとして用いられたものである、と考えることもできよう。

（西 康彦）



図3



図4

天神山城

天神山城は『鳥取県の地名』や『天神山城発掘調査報告書』によると湖山地東岸の天神山とその南方の卯山を中心とした城であり、室町時代に因幡守護山名氏が守護所を置いた地で、約八十年間守護所として機能していた。天神山に天守が置かれ、卯山周辺には町屋・侍屋敷・寺院群などがあり、城下町が発達していた。

その天神山城について無駄安留記には次のような記述がある。

山名伊豆守時氏光明院帝御宇当国守護ト而在城。後十四代にて天正年間豊公の為に没落。此城田圃中なれ共其頃は堀深く要害の地なり。先年田を深く穿しにこの堀跡に騎馬の貌歩卒の斃れたる形見えし由。今田中の道を天満縄手と云も昔の遺名なり。

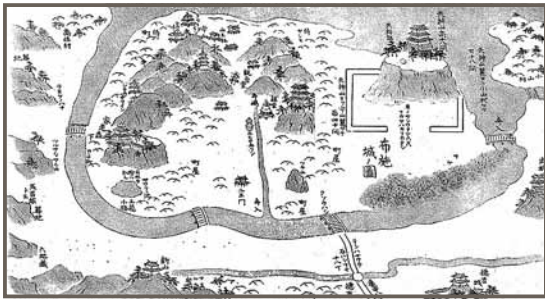
これを現代語訳すると、「山名伊豆守時氏が光明院帝の時代に因幡国の守護として在城した。その後、十四代の時、天正年間に豊公のために没落した。この城は今、田畑の中であるが、その頃は堀が深く要害の地であった。以前、田を深く掘るとその堀の跡に騎馬の形、歩兵の斃れている形が見えたということだ。今、田の中の道を天満縄手というのも昔の名残の名である。」となる。

まず、「山名伊豆守時氏光明院帝御宇当国守護ト而在城。」という記述についてであるが、この記述にある山名時氏とは『鳥取県大百科事典』によると、南北朝時代の武将であり、一三六三年に丹波・丹後・美作・

因幡・伯耆守護となった人物である。『鳥取県大百科事典』によると、天神山城の築城者は山名勝豊とあり、『稲場民談記』や『因幡志』にも同様の記述が見られた。これらのことから、山名時氏が生きていた時代と天神山城が築城された時代には大きなずれがあることがわかり、山名時氏が天神山城に在城していたという記述は作者の誤りであると考えられる。しかし、『天神山遺跡発掘調査報告書』によると、天神山城の築城者は、一四五九年から一四七九年まで因幡守護であった山名豊氏だという説もある。

次に、「天正年間豊公の為に没落」という記述についてである。この「豊公」とは豊臣秀吉のことを指す時に使う言葉である。『鳥取県大百科事典』によるとその豊臣秀吉が天正六年（一五八〇）に因幡守護の山名豊国が因幡統治の拠点としていた鳥取城を包囲し、そのとき豊国が秀吉方に降伏し、従ったとある。よってこの記述は、豊臣秀吉の鳥取城攻めにより因幡守護の山名家が没落したという事を述べているのではな





いかと考えられる。

次に、「堀深く要害の地なり」という記述について見ていく。堀があったのかを知るため、『稲場民談記』の天神山が描かれている絵を見てみた。この絵は正確性に欠けている点はあるが、内堀と外堀が描かれていることがわかる。また、『鳥取県大百科事典』や『天神山城発掘調査報告書』によると、天神山城は二重の堀があり、内堀は天神山を囲み東側が全長約四〇〇メートル、南側が全長約三〇〇メートルの長方形の堀で、外堀は天神山と卯山を囲み総延長約二・六キロメートルあったとある。これらのことから、天神山城は堀が深く要害の地であったというのは事実であると考えられる。

次に、「今田中の道を天満縄手と云も昔の遺名なり」という記述について見ていく。天満縄手について『稲場民談記』の天神山城が描かれている絵を見ると、徳吉に延びる道を「テンハナワテ」と記してある。また、『湖山の歴史』にも、「現在、九相橋からかけて、東方へ向かって徳吉村・徳尾村へ至る一路を、天場畷といい、また天馬の地名もある。これが天神山城の大手門道路のあった所である。」という記述がある。これらのことから、天満縄手とは天神山城から徳吉・徳尾村に至る道であったとわかり、現在でも「天馬」という小字も残っていることがわかる。

最後に天神山の現在の様子についてで



ある。天神山に調査に行くと建物は何も残っておらず井戸だけが残っており、それだけが天神山に城があったという名残を残していた。しかし、天神山からは湖山池を一望することができ、守護所が置かれたほど重要な地であったというのも納得できるものであった。

(友森 太二)

さんのうのほこら 山王祠

山王祠について、無駄安留記には次のように書かれている。

是山名氏鎮主の神なり。

山上広平にて毎年四月十五日祭式賑わし。近年は殊に群参。

「これは山名氏を守護する神である。山上の境内は広く平らで、毎年四月十五日に行われる祭りの儀式は賑わっている。近年は特に参詣する人が多い。」という意味である。

江戸時代には四月の二番目の申の日に祭礼が行われ、六月十五日に地祭が行われていた(『鳥取県の地名』)ということから、この文章に書かれている祭りがその祭礼だと思われる。

早朝神前にそろって修祓を受け、頭に神霊を戴いた麒麟獅子が、氏子の家を廻り、午後三時ごろには社前で三方舞を踏む。この手法は権現流の主流であり、鳥取藩独特の型を踏襲したものである。また、この因幡の麒麟獅子には、飛大法、六退法などの能の技法が取り入れられており、その賑わいは藩領の各神社の祭礼に伝播されたという(『松保郷土誌』)。無駄安留記の著者も、きつと人々にぎわう「布勢の山王さん」こと日吉神社でこの麒麟獅子を見て楽しんでいただのたろう。

出店ずらり、楽しいお祭り

(中略)

この山王さんのお祭り(五月の春の例祭)が楽しみでねえ。山王さんは子供の守護神ですし、私も親に連れてきてもらった記憶があります。かき氷屋さんの周りに子供達が集まっています。長い参道の両脇にも出店がずらーと並んで賑やかでしたよ。

山王さんは猿とも関係があったはず。二〇〇四年の申年の時はお正月のお参りでたくさんの方が押し寄せました。

(出典: asahi.com 「布勢の山王さん(上)」語り手・吉田幹男、聞き手・下地毅)

このように、日吉神社とこのお祭りは、今もなお、永く人々から愛されている。

『鳥取県の地名』『松保郷土誌』によれば、この祭りが行われた日吉神



社は湖山池東岸、布勢の卯山中腹にある。近世末までは山王権現と呼ばれ、親しみを込めて「布勢の山王さん」とも通称されていた。創立年代は不明だが、因幡の守護であった山名勝豊が、天神山に城を構える際に、近江国（滋賀県）比叡山麓にある山王総本山の日吉大社の分霊を祀ったことが起源とされる。湖山池を琵琶湖に見立て、山王権現や九院の仏閣を作り、琵琶湖の景色を山王社と一緒に湖山池の湖畔へとごっそり移したと伝えられており、湖山池周辺の箱崎の松原、志加奴、長柄、三津、溝口はいずれも近江湖畔にゆかりのある地名である。

さて、ここからは『鳥取県の地名』『松保郷土誌』を参考にして、山王社の辿った歴史をみていく。

山王社は天正八年（一五八〇年）、太閤秀吉の因幡攻めの際に兵火で消失している。その被害は大きく、御本宮のみならず、八王子社、唐崎社、若宮社全てが灰燼に帰したとされる。この時、魚町に分祀を行うことで難を逃れたという。

そして慶長九年（一六〇四年）、亀井武蔵守茲矩の時代になってようやく復興される。亀井茲矩は、神殿を再建し、神領を加え祭具を整え、自ら祭主となって度々参社した。元和三年（一六一七年）になると、石見津和野に改封され、因幡は池田光政の封領となる。光政の時代には布勢の古城を本城と呼んでいたが、鳥取の久松山で築城が始まると布勢の町勢がそのまま鳥取に移り、町屋も侍屋敷もすべて撤去され、山王社も農地に開拓されてしまった。それでも、その後封入した初代鳥取藩主池田光仲は山王宮を崇敬し、社領一石六斗五升五合を与えたという。

そして、鳥取藩主池田光仲の登場した寛永九年（一六三二年）から明治二年（一八六九年）の版籍奉還までの約二四〇年間、山王社は藩主池田家の祈祷所として尊ばれ、若殿姫君から士分、町人の子供、農民の子

弟と様々な人々に愛されていたようである。山王社には小児守護・疳病のご利益があるとされ、この評判は出雲・但馬の近隣国まで広がっていた。祈願成就のお礼に参拝することを報賽というが、これにより社殿は石細工・陶器の猿などでいっぱいになったという。このことから、山王社がいかに人々に大切にされていたのかが分かる。

現在の日吉神社という名称については、明治三年（一八七〇年）の因伯寺社領取調帳（県立博物館蔵）には「布施社」、同年十二月の「在方諸事控」には「日吉社」と書かれていることから、この間に改称されたと考えられている。また、明治五年に郷社となったが、この年の十一月には村社になったとされる。

さて、何度かさる（申・猿）という言葉が出てきていることから分かるように、猿はこの山王権現の神使とされている。明治二十五年旧六月二十四日、本殿両脇に銅猿三体が鑄造奉納された（『松保郷土誌』）。この時、銅猿の材料として、町の女房が競うように沢山の柄付きの白銅鏡を奉納したということで、子を持つ母親にとって山王社がどれだけ大切な場所だったのかが分かる。しかし、推測するとこの銅猿は『松保郷土誌』において「出征兵士となって応召」ということから、国によって戦時中の武器の材料に使われてしまったようである。現在の日吉神社にある銅猿は、昭和二十五年五月、森下久平によって当時のものを再現したもので、神の使いとして今も人々から愛され、大事にされている。

（太田 志津香）



横枕・朝日寺

ちようじつじ

横枕村の現在の地名は、鳥取市横枕である（『鳥取県の地名』）。『因幡志』によると、衣笠山を源とする猪子川に沿い、猪子谷の入り口で玉津村と倭文村の付近に位置するとされている。猪子、玉津、倭人などの地名は現在もそのまま残っており、周辺地域の方にとってはなじみのある地名だろう。

朝日寺は横枕にある日蓮宗の寺である。無駄安留記本文にはこの寺について

横枕薬王菩薩 医王山朝日寺

とある。薬や医という文字からもうかがえるように、朝日寺の本尊は薬師である。さらに続く記述には、

往古□池なりしにや土中より掘出す。安産を守り給ふ。会式には群参す。

とある。これを現代語訳すると、「昔、□池であったためか、土の中から本尊を掘り出した。この本尊は安産を守ってくれる。会式の時には多くの人が参拝する。」となる。会式とは仏教の法会のこと、特に日蓮宗では宗祖日蓮の命日に行う法会を会式といい、毎年十月十二、十三日に執行される。『鳥取県の地名』によると、朝日寺の薬王菩薩は近年ま

で安産の霊験あらたかな仏として参詣客が多かったようだ。

無駄安留記には、朝日寺について次のような狂歌が記されている。

横枕して待つほどに村雲のはらめる月も生まれ出けり

この狂歌には、横にした枕と横枕という地名が掛けてある。また、はらめる月の「はらめる」は「孕む」、「月」は満月の真んまるな様子で妊婦の大きくなった腹を表しており、朝日寺の薬師に祈ると安産のご利益があることを詠んでいると推測できる。

では、続いて、無駄安留記に記載されている朝日寺の絵と現在の朝日寺を比較してみる。

絵には、山の斜面の下に、塀に囲まれた寺がある様子が描かれている。また、塀の門をくぐってすぐに大きな松と石碑が描かれている。そのほか、山門を入って左奥に鳥居も描かれており、神社があることがわかる。現地に出かけてみると、現在も塀を入ってすぐの門の付近に石碑があ





り、奥の方には鳥居が確認できた。また、石碑と鳥居の位置関係も、無駄安留記本文の絵と一致している。そして、石碑には天明元年六月十三日と刻まれている。これは石碑が作られた日付と考えられる。天明年間（二七八一〜二七八八）は無駄安留記の成立年代の安政年間（一八五〇〜一八五九）よりも昔なのでやはり絵の石碑と同じ石碑だと考えられる。朝日寺は、寺の敷地内に神社が存在し、明治時代の神仏分離令後も寺と神社が分離されなかった珍しいケースであろう。

先ほど紹介した無駄安留記本文の中には「池だった場所の土の中から本尊を掘り出した」という記述があった。しかし、『鳥取県の地名』には本尊は室町時代の行基が作ったといういわれもあることが分かった。この本尊はかつて近くににあった薬王寺のもので、その寺が永禄年間

（一五五八〜七〇）に焼失したため、芳心寺八世の日勇が元禄年間に草庵を建立して朝日寺と改称して本尊を移した、とされている。

ところで、横枕は地名としては珍しい印象がある。この地名の由来には横枕にある朝日寺が関係している。無駄安留記本文に、朝日寺には安産の御利益の記述があるため、地名の由来との関連を調査していった。横枕の地名について『因幡志』に二つの由来の記述がある。まず一つ目は、この地域の

婦人が分娩の時に、昔からの習いで横に臥し枕について安らかで自然なお産を待つからであるというものだ。二つ目は、布勢の屋形の山名左衛門の内室が難産の時に稲田山の薬王寺で祈祷をしてもらい、その後に内室が夢の中で老婆に、枕を起こして横に臥せると良いと言われ、その通りにすると、たちまち一男を安産したためだという説である。ここ出てくる稲田山の薬王寺とは、前にも述べた元々朝日寺の本尊があった寺である。

このように、これまで横枕朝日寺について調べてみて、「横枕」という個性的な地名の由来と朝日寺の本尊の云われの中に見出せる関係が次第に明らかになっていき、興味深く感じた。

（植田 有佳）

菖蒲座光寺

私は今回、鳥取市菖蒲にある座光寺について調査することになった。

無駄安留記の中では和歌と共に絵図も添えられていた。菖蒲座光寺は菖蒲集落の西方山裾にある。宗派は天台宗で本尊は薬師如来である。『因幡志』の中では薬師寺と号する大寺であったと伝えられている。この座光寺に安置されていた薬師如来像は現在、京都市下左京区因幡堂平等寺に安置されている。そんな薬師如来には霊験が多く残っており、『因幡堂縁起絵巻』に描かれている。『因幡堂縁起絵巻』は三巻からなる縁起絵巻で座光寺について次のような内容である。

因幡一宮への神拝の勅使として下向した橘行平は、夢のお告げに従い、賀留津（現、鳥取市賀露）の海中から薬師如来像を引き上げた。薬師如来像を祀るため、因幡国内に薬師寺を建立し帰京した。その後、薬師如来像が、台座と光背を残し行平を追って都へ飛び去ったため、薬師寺は座光寺と呼ばれるようになった。行平は、薬師如来像を祀った利益により因幡守に任じられた。

以後、因幡堂は都の人々の信仰を集め、大きく発展し、行平没後も薬師如来像はある大臣の姫が腹のふくれる病になったが、因幡堂に参籠したところ平癒したことや、身寄りのない女が両親を供養するための費用を得るため身を売った。憐れんだ薬師如来は、寺の近くに住む裕福な御家人の夢に現れ、女を助けるように告げたことといった霊験が数多く残っている。さらに、吉岡温泉の由来にも座光寺の薬師如来が関係して

いる。

座光寺の薬師如来には単に京都に飛んでいた物語が記されているだけでなく、無駄安留記本文にも記載があるように吉岡温泉の由来に関わるなど鳥取にも広がりをもっていることが興味深い。

無駄安留記の本文には、

行平卿任国時にこの本尊
薬師仏は古海の底より出
現なり。

と小さく本文の右に添えられていた。これを現代語訳すると、「橘行平が任国されていた時にこの本尊薬師如来像は古海の底から出現した。」となる。この記述は、『因幡堂縁起絵巻』と二つの点で異なっている。一つは、無駄安留記では「任国」つまり「国司」として赴任したとなっているが、『因幡堂縁起絵巻』では「勅使」とあることから橘行平の役職名が異なっている。二つめには、薬師如来像を引き上げたのが賀露津



ではなく古海であるということである。さらに無駄安留記本文には、次のように記されている。

同 菖蒲村 座光寺 是京師因幡薬師の址なり。此山独孤にして南の山釣の山なり。

是中納言在原行平の故事なり。亦峯に古松あり。橘行平植えたまふ。いさり松と云々。是地往古海辺なりし由。故に古海の称あり。風景秀逸なり。

これを現代語訳すると、「高草郡菖蒲村の座光寺は、京師因幡薬師の跡である。この山は独立した山で、南の山は釣の山である。釣の山の名は中納言在原行平の故事に由来する。また、峯には古松がある。橘行平が植えた。いさり松とか言う。この地は昔海辺であつたといわれがある。そのため古海と称されている。風景は秀でて優れている。」このいさり松についてだが、無駄安留記の絵にもしつかり描かれている。しかし、現在は枯れてなくなっているという。この松は、地元の人の話によると「行平納言の網干しの松」と呼ばれ、行平が漁の網を干した松だと言われている。

(谷川 美香)



多地見峠

多地見峠（現在の表記は立見峠）は宮谷と本高を結ぶ重要な交通路で、その道は松上まで続いていた。無駄安留記の絵を見ると、画面左の道は、現在は一部舗装が施され、車で通ることができるようになっているが、画面右の道はほぼ使われておらず、未だ残る山道には当時の様子を見ることが出来る。

無駄安留記に多地見峠がどのように書かれているか説明し、次に、多地見峠はなぜ無駄安留記に載ることになったのだろうか、作者にとって「多地見峠」とは何だったのだろうか、述べたいと思う。

結論から言うと、多地見峠は佳景の地という意味での名勝地では決してなく、「怪異の舞台」であり、その評判を耳にした著者が興味本位で訪れ、無駄安留記に掲載するに至った、とするのが私の見解である。理由は以下に書く立見峠についての調査報告を読んでもらうと分かると思う。多見峠の項目は、見開き一ページに渡る絵、数行の説明文、狂歌によって構成されている。順に見ていく。

絵には、無骨な山肌とまばらに生えた木々が一本の道を囲っている様子が描かれている。通行人の姿があったり、「松上道」という表記があったりと細かい書込みが見られるが、ここにはおよそ名勝地とは言い難い風景が描かれている。現在の峠を写真で見ると、道標を兼ねる地蔵と、境界を守るといふ賽の神の石碑が建っている。

これに添える形で、次のような漢文訓読調の文章がある。

多地見峠

山名家十一代

山名弥次郎殿

永禄年中武田

又五郎反逆之時

此阪而合戦終

自殺。途ヨリ東

山平二埋。不思議

有テ後西山二遷

シ八幡宮ト改崇。

本高村氏神也。

要するに、山名弥次郎なる

武將の自害を機に不思議な出

来事が起こるようになり、鎮めるために八幡宮として祭った、ということである。『稲場民談記』「多智見合戦并ニ弥二郎殿討死之事」には、弥次郎についてより詳しく書いてある。この説明書きによって、立見峠が交通路であるのと同時に、「古戦場」であったということが分かる。

本文をみると、さらなる怪異が登場し、ますます「怪異の舞台」としての性格が強くなっていく。





松樹蔭々として物すごし。往古は阿頼女郎とて老狐旅人を迷せし由。今も気疎かりける山路なり。

現代訳すると、「松が生い茂っていてどこか恐ろしい。昔は阿頼女郎狐という年を経た狐が旅人を迷わせたという。気味が悪い山道である。」となる。「恐ろしい」「気味が悪い」とは、およそ名勝地に寄せるような形容ではない。ここにある「阿頼女郎狐」とは、鳥取の民話に登場する「おとん女郎狐」のことである。これについては『鳥取県大百科事典』にエピソードが載っており、ここではその中から「おとん女郎」という名前の由来が書いてある項目を紹介しておく。

古くから因幡一円に語られた動物報恩譚。昔、立見峠にすんでいる狐が子どもを生んだ。その女狐は乳が出ないので困っていた。そこへ毎日

のように峠を通って行商する油屋さんがいた。油屋さんはいつも峠の上で一服するので、女狐はこっそりと油を盗んで子狐を育てていた。そのうち子狐が成長したので、女狐は鳥取城下の油屋さんの家に行つて、一部始終を話した。「そんなわけで、子どもも今では立派な娘になりましたので、この上はご恩返しに、どうぞ自分を女郎にでも売って、そのお金で大きな油屋さんになって下さい」と言う。油屋の主人は驚いたが、女狐の言う通りにする。美しい女に化けた狐を連れて京都へ行った油屋さんは、一力茶屋に「おとみ」という名で売り込んだ。一力茶屋では美人の「おとみ」に五十両の金を払い、「おとみ女郎」と名づけて客を取らせていたが、三味線もひくし歌もうまいし、踊りや舞いも上手だから一度に人気が上がった。油屋さんは五十両を受け取って鳥取に帰り、その金で城下一の油屋になったという（「おとんじよる狐」鷺見貞雄）。

なお、「阿頼」という表記は、今回の調査で目を通した資料のなかで、唯一無駄安留記にのみ見られたものである。

この二つの怪異に関して興味深いことは、弥次郎の霊が八幡宮として祭られることによつて鎮まったのに対し、おとんじよる狐について、その終結がどうなったかを書いた資料がないということである。また、多地見峠の周辺地域では、おとんじよる狐について現在も語り継がれているということからも、「おとんじよる狐」民話は完結しておらず、今も脈々と伝承されていると言えるだろう。

立見峠には次のような狂歌が添えられている。

化かされておとむ女郎と木の根をば

まくらなとこで遊ぶおかしさ

解釈すると「おとんじよる狐に騙されて、真暗なところで木の根と戯れるおかしさ」となる。「どこ」は、場所を表す「所」と、女郎という言葉と関連する「床」という二つの読み方ができる。怪異を「おかしさ」と読むあたりに、無駄安留記の特徴の一端があらわれているように感じられる。

(丸尾 真弘)

吉岡箕上山

箕上山は、湖山池の南に位置する標高二九七メートルの険しい山である。かつて安土桃山時代の武将である吉岡将監の城があった。箕上山について、無駄安留記には次の様に紹介されている。

氏神前より右に往て登こと凡廿町余。この幽谷に鞭やぶとて昔将監の鞭を突立名残を惜れし処が今篁となれる由。

この頃大蛇栖するよし。矢倉天守の址平にして此処より高草一円風景無双なり。近辺の高峰天外に秀たり。

千代までと鞭は繁れど打つけに

捨てにし君のことおしぞおもふ

ここでは箕上山に関して、主に吉岡将監との関わりを意識して書かれている。特にこの中では「鞭やぶ」についての逸話が語られている。「鞭やぶ」についての説明部分を現代語訳すると、次の様になる。

かつて箕上山城の城主であった吉岡将監がこの地を去る際、名残を惜しんで愛用の鞭を地面に突き立て、残していった場所がある。それは鞭やぶと呼ばれ、現在ではあたかも鞭を思わせるような竹やぶとなっているものだ。

この由来から本文内の和歌も詠まれており、「鞭やぶ」がある程度有名な場所であった可能性がある。しかし調査不十分の為、裏付けが取れておらず、その場所が現在の箕上山のどの地点であるのか、現在ではどのような風景になっているのか等は定かでない。現在ではこれら、鞭やぶをはじめとする箕上山についての情報が、地元の人々の間でどの様に知られているのかなど、気になるテーマも考えることが出来、追って更なる調査の必要を感じる。

次に、箕上山城主であった吉岡将監について、及び箕上山城移転の経緯に関して説明する。「吉岡将監」とは、元々文明六年（一四七四）に因幡国におかれた吉岡荘の地頭の名である。この名は吉岡家当主が代々受け継ぐものであり、ここで主に挙げる「将監」、つまり箕上山城を築き、防己尾において合戦を行った吉岡将監は永禄のはじめに父の跡を継いだ「吉岡将監定勝」なる人物である（河本英明『防己尾城の攻防戦』）。





以下は将監の人柄について、『稲場民談記』『吉岡防己尾城合戦之事』から一部を現代語訳したものである。

この将監という侍は昔からの国人で、代々この谷の領主であり(中略)常に武道の心がけ深く気持ちには慎ましかで、人の風下に立ち、欲を持たない。勇ましきことこの上なく、弓を良く引き、馬術に優れる、智が立ち神出鬼没に陣を動かし敵を欺くのが上手かった。

この様に語られ、非常に優れた人柄であったと見なされていた。

将監はじめ、先代より受け継いだ丸山城(鳥取市六反田)に居たが、戦乱の世の中で守りを固め

る必要を悟り、険しい箕上山に城を移した。しかし交通の便が悪く、包囲される恐れがあった為に、将監は七年程度を箕上山で過ごした後に、湖山池そばの防己尾に新たな城を建てそちらへ移った。箕上山はその後、支城として敵の侵攻を見張る、見張り台の様な役割であった。簡単にまとめると、城移転の経緯はこの通りである。

以上を受けて、和歌を言葉を加えて現代語訳すると次の様になる。

いつまでも共に居られると思っていた将監とその鞭たちだが、急に居城が移ることとなり、鞭は地面に打ち付けられ残された。突き立てられた鞭は、捨てていった将監のことを強く慕い心配するのである。

合戦に向けて建てられたものの合戦を経験出来なかった箕上山城は、城として不遇であったと言える。それに加え、慕われるべき将監の人柄もあったことで、無駄安留記作者はこの様などこか切なく感じられる和歌を詠んだのではないだろうか。

(野崎 祐太)

葛つづら籬尾砦お

葛籬尾砦（現 防己尾城跡）は、現在湖山池南西岸にあり、湖山池に突き出した尾根上に建てられていた。また現在の地図では「葛籬尾」ではなく、「防己尾」と表記されている。「防己尾」という呼び名はもともと地元の呼称で、江戸時代に定着したものと考えられている。（以下、「防己尾」と表記する。）

まず無駄安留記本文を見ていきたい。無駄安留記の中で葛籬尾砦は以下のように書かれている。

是も将監の仮城の墟なり。箕上より此処に遷り三年にして秀吉公の為に落城。今僅に其石垣の形残れり。内室の墳墓あり。

これを現代語訳すると、

（箕上山と同様に）ここも将監の居城の跡である。箕上山からここ（防己尾）に城を移して三年後、豊臣秀吉勢に攻められ落城した。今ではわずかに城の石垣の跡が残っているだけである。奥方の墓もある。

となる。

この文では防己尾城にまつわる逸話がごく簡単に書かれているが、詳

しいことは先に述べたとおりである。また本文に書かれている「内室の墳墓」であるが、様々な文献を調べてみたが詳しい情報は何も得られず、実際調査に行ってもそれらしき跡は見つからなかった。

続いて短歌である。

つづら尾やなかひなくもいにしへの

君を覆ふて隠さざりける

現代語訳は以下の通りである。

つづら尾よ、「つづら」という名がついていながら秀吉に攻められた際、どうして主人を覆い隠して（守って）やらなかったのか。

この短歌に出てくる「つづら」は掛け言葉になっていて、二つの意味が隠されている。ひとつは防己尾城の「つづら」、そしてもう一つは衣服などを収納するために使われていた「つづら」というかごである。そしてこの中に出てくる主人とはもちろん吉岡将監のこと。「つづら」というかごの名前をもらっているながら秀吉から主人を隠して守ってやれず、最終的には落城してしまった防己尾城のことをこの短歌では皮肉にうたっている。

『稲場民談記』によると城跡は城が建てられていた本丸、その横に位置する三の丸、そして少し東側の二の丸と、三つの丘から成り立っている。現在でもこの三つの丘はすべて残っており、公園として利用されていた。また本丸を登ってみたところ頂上からは湖山池が一望でき、そして頂上の中央には「防己尾城址」と彫られた石碑が建てられていた。城の跡型は現在では残っていない。『因幡志』に載っている鳥取の城の位置が描かれている地図では毛利家時代には防己尾城は描かれていたが、秀吉時代の地図では描かれていなかった。このことより、防己尾城はごく短期間しか存在しなかった城であったことがうかがえる。

続いて防己尾城にまつわる話について紹介したい。ここはもともと吉岡村の箕上山に居城を築いていた吉岡将監の第二の居城として建てられた城であった。毛利勢と織田勢の決戦が近いことを予期した将監は、箕上山から防己尾の地へ城を移すことにした。これは箕上山では雨天時における雲や湖面の霧によって視界が妨げられるといった理由や、防己尾は湖山池に面していて水陸の交通が便利で、鳥取城や毛利勢からの援助も受けやすいといった理由によるものだった。また防己尾城は湖山池東部に位置する天神山城からも湖山池をはさんで相向かいになっていたため、敵陣から攻められにくかったことも大きな理由の一つであった。

このことから防己尾城は「天然の要塞」と呼ばれていたようだ。防己尾城が鳥取城とともに秀吉勢に攻められた際、将監はその豊富な知識と経験からたびたび秀吉勢を蹴散らし、ついには将監の弟右近が秀吉の千成瓢箪の馬印を奪い取ったという逸話も残っている。防己尾が三回に及ぶ秀吉勢との戦いに見事勝利していたことから、将監がいかにすごい人物だったことが分かるだろう。しかしながらその後、再度秀吉勢に攻められた防己尾城は兵糧攻めのために落城することとなる（河本英明『防

己尾城の攻防戦

今述べた防己尾城の歴史的な話と無駄安留記の記述との間には大きな違いは見当たらないため、無駄安留記の防己尾城に関する記述は間違っていないと考えられる。ただ「内室の墳墓」は現在ではどこにも残っていないので、無駄安留記が書かれた時本当に内室の墳墓があったのかということが唯一疑問として残った。

今回調査を行っていくにあたって、防己尾城について書かれている文献があまりにも少なかった。このことを反省点に、現地で防己尾城について詳しい話を知っている方にお話をうかがうなど、更なる情報収集が今後の課題であると考えている。

（濱田 咲）





吉岡温泉・宝泉寺

吉岡温泉は無駄安留記で次のように記されている。

屋敷谷という長者あり。其娘なる者重病に依同郡菖蒲座光寺薬師仏を祈る。

夢想に頼りて柳の下の薬師仏を掘出す。其所より温泉涌出たり。

于今其株より湯涌出る。是何れの世なる哉。

当邑氏神ハ新宮大明神とて箕上山の下に祭る。

又昔牛を索ヒて通りしに此湯壺ヒの処ニて痛たる足を入て不動。終に全快すると。

現代語訳すると「屋敷谷という長者がいた。その娘が重い病気なので同じ高草郡の菖蒲座光寺の薬師仏に祈願した。夢の中で仏が現れ告げた教えに基づいて柳の下の薬師仏を掘り出した。この場所から温泉が湧き出た。ここに今その株から湯が湧き出ている。これはどの時代の出来事なのだろう。この村の氏神は新宮大明神といって箕上山の麓に祭っている。また昔、牛を引っ張って通った際にこの浴槽に痛めている足を入れてじっとした。そうするとついに

完治したという話も聞いた。」というようなものだ。

吉岡温泉は現在鳥取市街の南西、湖山池の南方、鳥取市吉岡温泉町にある。「吉岡」という地名は、古くは「葦岡」の地と呼ばれ、葦の自生地であったが、何時しか「吉岡」と呼ばれるようになった(『防己尾城の攻防戦』)。また、温泉が湧出することから「湯村」と称されていた(『鳥取県の地名』)ところ、永祿の頃(一五五八―一五六九)、吉岡氏が当地を領有した際に、今在家という集落をここに移動させて吉岡湯村と名付けた(『吉岡温泉滞在日記』)ともある。

無駄歩留記の記述通りこの地の氏神・産土神は新宮大明神で、明治以降吉岡神社と改称し現在も箕上山の麓にある。湯村の南に位置し、同じ新宮大明神を氏神としてもつ、湯村の湯脈が村の谷から湧出する湯谷村が明治一〇年(一八七七年)に吉岡村に合併する(『鳥取県の地名』)。冒頭の長者は、吉岡温泉発見伝説から吉岡長者(葦岡長者)を指している。小泉友賢が著した『吉岡温泉記』では

本より家富財ゆたかにして田園山林牛馬のたぐひ限なく眷属親類富さかへ奴婢男女数百めしつかひさながら七珍萬宝にあきみたりされども此長者夫婦かかる富貴榮花にも驕慢の心なく天性



心正直にして天道を敬ひ尊び冥慮をおそれ物を害する心なく他人の善をなすをよるこび他人のうれひあるをばなげき飢寒に及ぶものにハ多の衣食をほどこしあたへわびしき貧民にハ米穀をかしてもそのつぐのひをうくる事なし（宝泉寺蔵『吉岡温泉記』）

と吉岡の老翁から聞かされた長者の人となりを書いてある。多くの富を持ちながらも貧民を助け、信心深い人物だったようだ。吉岡長者の墓と伝えられている古墳は、吉岡宝泉寺山門前に残っており、埋蔵されていた土器（須恵器）から六世紀のものと推定されている（吉岡一号墳（葦岡長者古墳）内の立札）。

于今其株より湯涌出る。是何れの世なる哉。

の言葉は、伝説の株湯が実際に湧き出る様子を見た無駄安留記作者の感慨だろう。吉岡温泉の源泉とされるこの株湯は、前ページ上段の写真のようなシンボルが作られ、湧き出る様子を現代の我々も違う風景の中で見ることができる。

最後の

又昔牛を索（ヒイ）て通りに此湯壺の処にて痛たる足を入て不動。終に全快すると。

の文章は吉岡温泉の効能の高さを作者が聞き記したものだろう。吉



岡温泉は胃腸病・皮膚病・神経痛・リマウチなどに効能がある亀井竈矩による亀井殿湯（亀井湯）など、ときの権力者が専用の禁湯を設けたこともある（『鳥取の地名』）。

長者が掘った霊仏は吉岡温泉の薬師堂に祭られ、柳の古木を刻んだ薬師仏は宝泉寺の御本尊としてそれぞれ収められている（『鳥取県大百科事典』）。

薬師堂は誰の手によって、何時の時代に

開創されたかは定かではないが、『吉岡温泉記』には吉岡長者は掘出した霊仏を自宅の持佛堂に祀っていたが、その後薬師堂を建立して本尊として安置したとある。吉岡温泉株湯シンボル近く、吉岡温泉薬師堂跡横に設置されている立札には一〇一二年（長保一年）にこの場所に建立とあった。その後防己尾城落城の翌年、一五八二年（天正十年）に吉川元春の吉岡攻めの兵火で焼失、亀井氏が亀井湯を開発する一六〇二年（慶長六年）に再建され、一七七一年（明和八年）に吉岡大火で再び焼失するも後に再建され、一九三三年（昭和八年）の県道矢橋線改修のため、現在の道路から少し外れた山道へ入る道の途中に移されたという。



宝泉寺

宝泉寺の裏山から眺めた景色とほぼ一致する絵が無駄安留記にある。湖山池を臨み、手前空と湖山池と山々で構成された景色は、趣ある風情を感じさせる。中央の二人の人物は寺参りを終え、帰路についているのか、もしくはこれから吉岡温泉を観光するのもかもしれない。龍泉寺とここには記してあるが、あまりにも酷似しているため、これは無駄安留記作者の誤りであると判断した。また同絵の中に青島の記述もあるが、指示す島はその地点から眺めると、地理的には団子島であり、これも作者の誤認であるとする。しかしながら、作者がこの場所に立ち筆を走

らせたのは絵という記録に残っている。湖山池を臨み、吉岡を眺望しながらこの場所で感慨に耽っていたのではないだろうか。現在では多くの家屋が立ち並び、無駄歩留記の絵の時代とは雰囲気異なるも、その点を踏まえて面白みのある景色をみることできる。

(清水 浩美)

【参考文献】

- 『鳥取県の地名』
- 『鳥取県大百科事典』
- 河本英明『防己尾城の攻防戦』
- 『樗谿叢書第一集 姫君姉妹 吉岡温泉滞在日記』
- 『吉岡温泉記』



釣ノ山吉祥寺

無駄安留記本文には

釣ノ山吉祥寺 禪宗

是橘藏人行平釣シ玉ウ跡なり。

菖蒲座光寺の東隣。小山なり。

此辺総て入海なりし故に今も古海の称あり。

此寺大夫和田氏より扶持する由。

と書いてある。これを現代語訳すると次のようになる。

釣ノ山吉祥寺 禪宗

この寺は橘藏人行平が釣りをなさった跡である。

菖蒲座光寺の東隣。小山である。

この辺りは昔総て入り江であったために今も古海という呼び名がある。

この寺を大夫和田氏が扶持したということである。

橘行平とは座光寺の項にも出てきた平安時代中期の貴族である。この橘行平は座光寺ともかわりが深く、因幡一宮への神拝の勅使として下向した際に夢のお告げに従い、「賀留津」、現在の鳥取市賀露の海中から薬師如来像を引き上げ、薬師如来像を祀るため因幡国内に薬師寺を建立し帰京したという話が残っている。

是橘藏人行平釣シ玉ウ跡なり。

此辺総て入海なりし故に今も古海の称あり。

とあるが、実際に吉祥寺のあった菖蒲村の近くまで海が入り込んでいたようだ。

記述の中の大夫和田氏とは代々鳥取藩家老を務めた一族である。本姓は源氏であり、六孫王・源経基の子・満正を祖とする。和田氏は代々近江国甲賀郡和田谷に住んでいたが、池田氏との縁は和田八郎信維が天正一〇年（一五八二）に池田恒興の客将となり、二三〇〇石を与えられたことから始まる。その後、池田恒興の子の正信の代に正式な家臣となり、池田輝政に仕えて四六〇〇石が与えられた。池田忠継に付き従って岡山に移ってからは家老職を務め、寛永九年（一六三二）の

鳥取転封後は着座家に列し、伯耆国河村郡に所領が与えられ、荒尾氏に次いで格式の高い家として遇された（鳥取県『鳥取藩史第一巻 世家・藩士列伝』一九六九年）。



無駄安留記本文には大夫和田氏が吉祥寺を扶持したとあるが、そういった文献は見つけられなかった。

吉祥寺は存在していないが、無駄安留記の絵から見て座光寺の隣の釣山、現在菖蒲神社がある辺りに存在していたのではないかと思われる。無駄安留記の記述に「座光寺の東隣」とあるがこれは南隣の間違いである。

写真の右端が座光寺、左端が菖蒲神社である。

吉祥寺は明治四年（一八七二）に安長村、現在の鳥取市安長にある曹洞宗東円寺に合併された（『鳥取県の地名』）。

（蓮佛 杏奈）



玉津鴨尾城

ひよどりお

鴨尾城は現鳥取市玉津村に存在した山城であり、築城主は武田国信とされる。天文年間の築城以来、長年に渡って因幡武田氏の拠点であったが、一五七五年（天正三）に、山名豊国によって鴨尾城主武田高信が追放され、その後まもなくして廃城した。

安部恭庵の著作『因幡志』では鴨尾城が因幡地方における主要な史跡として取り上げられており、「山上段々に切平らし乾堀門櫓等の跡其儘にあり尤高山にて郡中は勿論邑美八上氣多の数郡を眼下に望む」とされている。

小泉友賢の著作『稲場民談記』においては、武田高信の起こした謀反について記された「武田又五郎高信謀叛之事」の他、鴨尾より追われた高信が謀殺されるにいたる逸話の記された「豊国方便被誅武田高信事」等において、鴨尾城の存在が触れられている。

現在の鴨尾城跡には樹木が生い茂っており、麓からは遺構などを確認することはできなかった。散策路を通って鴨尾城に近づくにつれ、かつての曲輪の痕跡が漸く確認できるようになった。

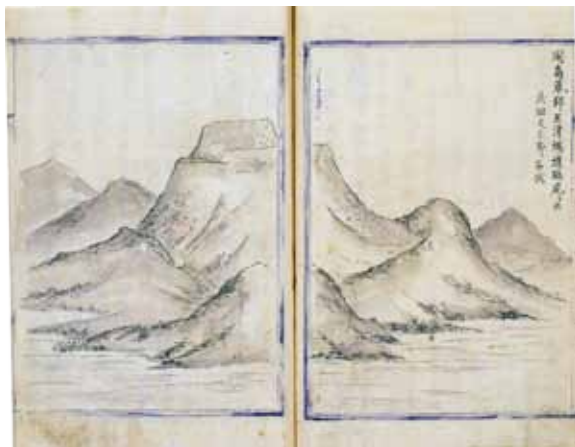
山の尾根に沿って四つの曲輪が段々に連なっており、戦国時代の幾多の城郭と比較してさえ、堅固な城であったことは想像に難くない。

無駄安留記（拾遺巻）の絵や、『因幡志』の鴨尾に関する記述などから、その造りとしては典型的な山城であったと推測される。

鴨尾城について触れるに当たって、無駄安留記の著者は当時の鴨尾城を描写した絵に添えて、その城主であった武田高信謀殺の逸話を記している。この武田高信という人物については、先に述べたように『稲場民談記』と、その強い影響を受けた『因幡志』においても取り上げられている。そしていずれも、武田高信の謀殺という共通の逸話を採録している。

武田高信の死が「謀殺」によつて、「大義寺」という寺院においてもたらされたものであるという点に関しては、『稲場民談記』・『因幡志』・無駄安留記ともに共通している。しかしその細部については、いくつかの食い違いが見られる。

『因幡志』において武田高信の死について述べられている箇所は、『稲場民談記』に依拠したと思われる「豊国方便を以て高信を八上郡散岐の大義寺に呼出して終に誅戮せられたり」とする一文のみであるために、『因幡志』と無駄安留記の比較は省き、『稲場民談記』と無駄安留記との





比較に絞る。

まず『稲場民談記』には、謀殺の首謀者として山名中務大輔豊国を挙げている。

豊国長臣ドモト評議ヲ遂ラレ、潜ニ知略ヲ以テ方便^{タバカ}リ寄セ可討様ヲゾ巧レケル。

一方、無駄安留記においては、謀殺を企てたのは吉川式部小輔であるとしている。

毛利家の臣吉川式部小輔が謀計にて反て甥をして伯父高信を滅せしむ。

次に、高信の最期についても、『稲場民談記』においては企てに氣付いた高信とその従者らは、鏑迫り合いの末に打ち取られたとされている。

頓^{タガ}テ門ヲ差（シ）堅メ本堂近
ク登ラントセシ処ヲ、心キ、
タル若党ドモ大勢隠レテ居
タリシガ、時分ハヨキゾト
飛（ビ）出（テ）、高信ニゾ
組ミケルガ、如何シタリケン

組（ミ）損ジタリケレバ、敵味方入り乱レ組（ミ）合（イ）切（リ）
合（フ）隙モナシ。高信モ迎モ通レヌ処ナレバ、太刀ヲ拔（キ）切（リ）
テ廻ル。去レトモ大勢落（チ）合（ヒ）テ、働クベキ様アラザレバ、
皆ヤミ／＼ト討（タ）レタリ。高信ヲバ森下出羽守ノ手ノ者ニ岸田
豊後ト云フ者組（ミ）留（メ）テ討（チ）ニケル。

しかし無駄安留記においては、高信が厠に入ったところを槍を突き入れて殺害した、としている。

大義寺に宴を設ける時に高信往て筵に着き暫して厠にゆく。壁外より鍵を入れて高信を害す。

高信の死に関しては、『稲場民談記』が定説とはされているものの、謀殺の真実は勿論、武田高信という人物自体についても多くの謎が残されている。短期ではあっても因幡という一国を席捲した武将であるが、その人物像を読み解くには史料が十分ではない。

その中で、無駄安留記に見られる記述は、わずかではあるものの高信の残した謎に一石を投じる役割があるのではないだろうか。

（出口 大介）



調査記録①





調査記録²



地域文化調査発表会

【開催日】2010年1月23日(土)
【場所】とりぎん文化会館第一会議室

